

書評

村瀬憲夫著

『大伴家持論 作品と編纂』

菊川 恵 三

○本書の構成と目録

本書は村瀬憲夫氏の万葉編纂研究としては『萬葉集編纂の研究―作者未詳歌巻の論―』（塙書房、二〇〇二）に続く二冊目であるとともに、大伴家持の作品研究でもある。「まえがき」によれば、「万葉集の編纂」に関心を置きつつ「家持の作品」を考察したので、第一部を家持の「作品と人」、第二部を家持の「万葉集編纂との関わり」としたという。注意しておきたいのは、編纂論としては断片的なものなので書名を『大伴家持と万葉集の編纂』としなかったこととわる点だ。一見、著者の遠慮深さとも思えるが、本書を読み進めると、万葉編纂研究に対する自身の研究スタイルを踏まえたものであることが判る。具体的には、編纂論の研究史を振り返る第二部、第一章に明らかだ。契沖・武田祐吉氏・伊藤博氏の「三先人」を振り返りつつ、同時代の研究者を取り上げ、伊藤

氏の「構造と編纂」の成果と問題点を見定めていく。さらに、最近の新しい視点として、末四卷（万葉卷十七・二十）の歌日記を扱う鉄野昌弘氏・山崎健司氏、新たな万葉集の全体像を描く神野志隆光氏、自らも参加し「構想論」の概念を提案する市瀬雅之氏などを紹介していく。これを受けて、次の発言がある。

本書は個々の作品・事象に密着して、それぞれの場面で家持が編纂にどう関わったのか、それが個々の作品の詠出にどうにしみ出ているのかを、個別に即して考察したものである。したがってその結論は断片的であることを否めない。（四頁）

小さな事象を大切にすることの誠実さこそが、本書の特徴である。

はじめに、本書の全体を見るために、目次を掲げておこう。

まえがき

第一部 大伴家持―作品と人―

第一章 移りゆく時―家持歌における「自然」と「時

間」―

第二章 大伴家持とほととぎす

第三章 大伴家持の相聞歌

第四章 大伴家持の相聞歌―恭仁京時代―

第五章 大伴家持の布勢水海遊覧の歌―景観万葉論の

ころろみ―

第六章 大伴家持の越中秀歌群

第七章 大伴家持と四季―春愁三首歌との関連におい

て―

第八章 大伴家持と鳥―春愁三首歌の理解のために―

第九章 大伴家持春愁三首歌と詩経

第十章 大伴家持の「防人歌」

第二部 大伴家持―万葉集編纂との関わり―

第一章 万葉集の編纂と大伴家持―三先人の見解と

その検討―

第二章 編纂研究の視点から家持を考える

第三章 大伴家持の譬喩歌―卷三「譬喩歌」部所収

の三首について―

第四章 湯原王・娘子歌群と大伴家持―万葉集後期

の贈答歌―

第五章 高市黒人歌の採録と編纂―黒人と家持―

第六章 万葉集卷六卷末部の編纂と大伴家持

第七章 万葉集卷十五遣新羅使人歌群の編者をめ

ぐつて―冒頭十一首贈答歌群の検討―

第八章 平群氏女郎歌群の採録

第九章 万葉集卷十七冒頭部歌群攷

第十章 書物を紡ぐ大伴家持―卷十七冒頭部歌群を

めぐつて―

第十一章 万葉集卷十七の性格

第十二章 万葉集卷十九の性格―卷十八から卷十九へ

―

第十三章 万葉集卷十九から卷二十へ―越中時代から

帰京後へ―

第十四章 万葉集卷二十の性格―「移りゆく時」をめ

ぐつて―

第一部は家持の作品を取り上げる。家持の全体を見通した一・二章、越中以前の相聞歌を取り上げる三・四章、末四巻を扱った五―十章からなる。第二部は研究史を中心にあつかう一・二章、家持以外の歌群を取り上げた四

八章、さらに末四巻の作品とつながりを論じた八〜十
四章に分けられる。

こうしてみると、本書の関心の中心が、家持の歌日誌
ともいわれる末四巻にあることがわかる。というのも、
第二部の後半（八〜十四）がそこに充てられ、第一部の
作品分析も、末四巻、中でも越中秀吟（本書では越中秀
歌）、春愁三首に集中する。家持には他にも、安積皇子
挽歌、池主との多彩な贈答歌・立山賦・出金詔書を賀く
歌など、多くの歌があるのだが、それらを単独で取り上
げることはない。その意味では、本書は「越中秀吟と春
愁三首を中心にした末四巻の作品と編纂」を軸にするこ
とを言えよう。

○第一部、大伴家持の作品と人

まず、第一章では、「移りゆく時」という時間意識から、
家持作歌全体を見通す。この論考は、近年（二〇一七年）
『萬葉集研究』三十七集に掲載されたもので、第一部の
論考十編の中で一番新しいだけでなく、ここの問題意識
と分析方法は、本書全体にかかわる。ここを丁寧に読み
解いてゆこう。

著者がまず取り上げるのは、「移りゆく時」を詠んだ
家持の歌々と左注である。巻二十の例から始まり、季節

ごとに咲く花が変化してゆく歌を数多く示しながら、
「家持は自然物を通して、「時」を見るという性向がある」
という。

万葉に花鳥詠が多いことを考えると、それは家持に限
らない古代和歌の一般的傾向ではないのかと思われる。
しかし、それらの歌に加え、題詞や左注に何度も繰り返
される「鬱結の緒」を散らそうとの言葉や、愁いや悲し
みの表現を見るとき、一般的な花鳥詠とは異なる、家持
の独自の視点に気付かされる。

3節の「家持歌と「時間」」では、四季の草花の移ろい、
越中時代に始まる季節と暦の齟齬、中国六朝詩からの学
び、春から夏へ時の経過を表現する「木の暗」の多用、
挽歌もまた「移りゆく時」が中心になることなどを列挙
する。そして、この「移りゆく時」が編纂と関わるもの
として、末四巻の時間配列を取り上げる。それは、単に
時系列に従ったのではなく、「部立てを捨てて、自己の
まわりに流れた時間に従って」編纂したもの（村田正博
氏）であるとの指摘に共感するのである。この第一章で
扱った作品とその分析が、本書のあちこちで繰り返し
それが本書を貫く中心テーマとなるのである。

次の第二章は、ほととぎす詠に絞って家持の特徴を明
らかにしようとする。具体的には、ほととぎすが「なつ

かし・めづらし」など、心惹かれて離れがたいものとして描かれること、また「鬱結の緒」を散らすものであったことに注目する。そして、越中時代に顕著になるほととぎす詠が、天平勝宝二年に最多となることを確かめて、その理由を望郷の思いを都の風流で晴らそうとしたと捉える。ほととぎす詠を通じて、家持作品全体を見通そうとする点、第一章と通じる。

一、二章で示される作品理解の視点、「望郷・季節の景（花・鳥）・中国文学の影響」は、越中秀吟・春愁三首を中心に分析した第六章～九章に受け継がれる。具体的には、第六章の越中秀吟十二首が「春の愁い・望郷・中国文学・先人の作歌」から論じられる。

また、七～九章を割いて、春愁三首について分析する。七章は、季節歌が越中以前の秋歌から、越中在任中に春・夏に傾斜することを確かめ、帰京後の春愁三首への道が越中時代に用意されていたことを確認する。八章では、家持の多彩な鳥の歌を一つ一つ確認し、ほととぎすやうぐひすが「鬱結の緒」をはらすものであり、千鳥の声を聞く「孤独」を指摘して春愁三首につながることを確かめる。さらに、九章は春愁三首の前に置かれた五首を含めつつ、中国文学の影響を『詩経』を中心として確認し、

「春という季節に、ゆえ知らぬ悲しみを歌った家持が、さらに詩経の一節を引用することによって、一層豊かな春の情と景の世界に仕立てた」と説く。

家持の花鳥詠と越中秀吟・春愁三首とのつながりについては、数多くの論考がある。その中で、本書独自の視点は、必ずしも多くない。しかし、歌ことばを丁寧な追い、背景つぶさに確かめるところに、氏の研究姿勢が現れる。それが読む者を柔らかに引き込んでいくのである。

○第二部 万葉集編纂と家持

第二部で気づくのは、二〇一六年以降の新しい論が、第十～十四章に集中することだ。つまり、八・九章に収められた卷十七冒頭部歌群を受けつつ、卷二十に至る末四巻を編纂の視点から論じることが、関心の中心にあったことが判る。なかでも、冒頭に越中秀吟、巻末に春愁三首をおく卷十九（十二章・新稿）に焦点が当たっている。それは第一部の作品理解と重なっている。

まず末四巻の編纂に入る前に、四～七章の家持以外の歌群の場合をみておこう。実は、家持編纂が確実な末四巻に対して、これらの歌群は、どこまで家持の編纂の手が入ったか判断が難しい。それだけに、本書の問題の詰め方がよく分かる。

・湯原王と娘子、遣新羅使人歌群

第四章は、巻四の湯原王と娘子の贈答歌群を取り上げる。この歌群の丁々発止のやりとりについて、氏は湯原王がまとめた結論付け、さらに「その実、湯原王一人による自作自演による産物」という。

確かに、この歌群には、整然とした題詞、共通した用字、波紋型対応などの整理がなされている。また、外的要因として、湯原王など志貴皇子系の人々が大伴家と親しかったこともある。さらに、娘子歌の「焼大刀のへつかふこと」という特殊な表現を、湯原王が別の歌で用いているとの指摘は大切だ。だからといって、これを湯原王の自作自演とするのには疑問を感じる。特殊な表現は、湯原王が娘子の歌を利用したとも考えられ（現に家持の場合には少なくない）、用例の特殊性もあくまで『万葉集』という資料の中のことである。

この歌群を巻四に収めるにあたって、題詞・用字の調整はあっただろうし、実際には歌の一部を改変したり、他にもあった歌を捨てることで、より魅力的な歌群にした可能性は高い。しかし、それがどの段階で、誰によってなされたかについては、推測にとどまる。

実は、第七章の遣新羅使人歌群では、類似の現象から正反対の結果を導いているように見える。この歌群は、

秋の再会を前提にし、同じ「嘆きの霧」が向向前と実際の海路で共有されるなど、歌群全体が共通の発想からなる。研究史のなかで「実録風な創作」と呼ばれるのも、うなずける。

七章では、冒頭の贈答歌十一首が、後の歌と照応することを取り上げる。伊藤博氏がこれらを実際の歌詠そのままではなく、編纂段階のものとしたのに対して、村瀬氏は「もうひとつ別の見解」として、これは限られた船旅の中での誦詠に由来すると説いて、実際の場で歌われたものであると論じる。しかし、これは湯原王の場合と同じ理由で、違う結論（創作・編集／実際の朗詠）を導くことになっていないだろうか。

歌群の中で、個々の歌同士が巧みに対応した時、それを編纂の結果か、場の規制による実際の歌かを判別するのは極めて困難なのである。我々の目の前にあるのは、編纂された『万葉集』であり、その歌の照応や配列の妙について明らかにすることはできて、元の姿や編纂の過程を一元的に論じることは難しい。このことは氏も承知の上であり、「まえがき」に次のようにある。

家持が万葉集の編纂にどのようなかたちで、どこまで関わったのか、そして万葉集が出来上がったのか、それを俯瞰的総合的にそして具体的に明解に解明す

ることは難しい。(三三頁)

次に、家持の編纂によることが明らかでない末四巻についてみてゆこう。

・巻十七の冒頭部歌群

巻十七は、天平十八年正月に本格的に始まる歌日記のまえに、天平二年〜十六年の三十二首の歌を取める。作歌時期からは巻一〜十六のどこかに入ってもおかしくなく、歌の内容も様々で統一性が見られないことから、従来から「補遺」とされることが多かった。

しかし、本書第九章では、それらを詳細に検討した結果、単に補遺を集めたものではなく、歌日記のプロローグというにふさわしいものとして置かれたと、積極的な意義を主張する。確かに、父旅人の大宰府帰京歌↓自らの越中赴任、弟・書持との贈答↓赴任直後の弟の逝去、赤人の伝誦歌↓山柿の門のように、巻十七に収められた赴任後の歌とつながる(八章の平群女郎歌群↓恋緒を述べる歌の関係を加えてもよいだろう)。さらに、冒頭部歌群中の、「独り」「ほととぎす詠」などをあげて、末四巻全体とつながっていることを明らかにする。

氏が指摘するように、編集上では歌日記のプロローグであるだけでなく、以降の作歌を引き出す役割を果たし

たのだろうか(このこと遺新羅使人歌群の場合と通じる)。

ただこの後、特に深くかわるものとして天平勝宝二年の作歌を取り上げ、「巻十七冒頭部歌群を纏めたのは、この天平勝宝二年頃の家持(の心情)」というのには賛同できない。それでは三年も後のことになるし、巻十七後半から巻十八の歌を飛び越えることになる。

たとえば、巻十九だけでなく十八のほととぎす詠も、春愁三首と共通する点があるとの指摘もある。つまり、末四巻のあちこちが、相互につながっているのである。そのことを確認しておけば十分なのではないか。

紙幅もほぼ尽きた。最後に、十一〜十四章の家持の歌日記についての作品と編纂意識をまとめておきたい。

十一章は巻十七「白雪応詔歌群」に注目しつつ、大君讚美・君臣和楽・文芸興趣を指摘し、「赴任地の風土に腰を据えて向き合ったことよって、新鮮で美的文芸的興趣に富んだ越中の歌をも生み出すことになった」とする。

第十二章は、巻十八の出金詔書歌など家持の「高揚期」が、巻十九の越中秀吟・春愁三首など「多作期」に影響を及ぼしたのを確かめる。また、巻十九の特殊性(仮名主体など)は、彼の会心作たる「大伴家持の歌集」であ

るがゆえのものだと結論付ける。巻十九を中心に、前後の作品が次々とつながることを確かめることで、作歌と編纂が結びついているとする。

第十三章は、越中時代から帰郷後を通じて「家持が何を志向していたか」を考えつつ、巻二十八への連動連接をいう。

最後の第十四章は、家持以外の歌を含みながら、「移りゆく時」と「永遠への願い」が寄り添うようにしながら「主旋律・副旋律」になって展開する。この家持歌の本質的な理解は、本書・冒頭の「移りゆく時」と連動して、首尾一貫した主張となっているのである。

（二〇二二年九月一五日刊、塙書房、A5版、五四八頁、

一五〇〇〇円＋税）

（きくかわ・けいぞう）／和歌山大学名誉教授・中京大学特任教授）

追記

村瀬先生には、四十年前、それまで全く縁のなかった名大大学院に進んだ時以来、公私にわたってお世話になった。和歌山大学に勤めたこと、美夫君志会に参加したこと、その後の私にとつて不可欠のものばかりである。その先生の書評を、この名大の国語国文学誌に書かせていただいたことに、奇縁を感じずにはいられない。

受贈誌 (二〇二二年九月～二〇二三年八月)

- 同志社国文学 九五、九六
同志社女子大日本語日本文学 三四
同朋文化 五〇
都大論究 五八
奈良学研究 二四
南山大学日本文化学科論集 二二二
二松 三六
二松学舎大学人文論叢 一〇七、一〇八
日本文学士院紀要 七六一、二
日本近代文学会北海道支部会報 二二五
日本近代文学館年誌 一七
日本語文化研究 二二六
日本語学論集 一八
日本語と日本文学 (筑波大) 六七
日本語日本文学論叢 一七
日本文学誌要 一〇五
日本文学ノート 五六
日本文学文化 二一
日本文学論究 (國學院大) 八一
日本文学論集 (大東文化大) 四六
- 日本文化史研究 五三
日本文藝研究 七二―二、七三一―
花園大学日本文学論究 一四
表現技術研究 一七
弘学大語文 四八
弘前大学国語国文学 四三
福岡教育大学国語科研究論集 六三
藤女子大学国文学雑誌 一〇四、一〇五
文学研究 (聖徳大学短期大学部) 三三三
文学史研究 六二
文学論藻 (東洋大) 九六
文教国文学 六六
文藝研究 文芸・言語・思想 一八九
文藝と思想 八六
文藝と批評 一三四、五
文献探究 六〇
平安朝文学研究 三〇
待兼山論叢文学篇・文化動態論篇 五五
三田国文 六六
美夫君志 一〇三、一〇四
武庫川国文 九一、九二
武蔵野大学日本文学研究所紀要 九